

## 総合政策学部のキャリアディベロップメントの研究

研究代表者 総合政策学部・教授 高畑由起夫

2010年度では、(1) 2009年度に実施した関西学院大学総合政策学部卒業生(1999年～2008年)のキャリア・ディベロップメントに関するアンケート・ヒアリング調査結果の分析の継続とその成果の出版、(2) 卒業生に対する再度のアンケート調査の実施という2つの作業を並行して実施しました。なお、本調査の目的は、卒業後に在学時の勉学ならびに諸活動がその後のキャリアパスにどのように影響したか、卒業後の経験を踏まえて、卒業生自身が在学中に受けた授業や経験した活動についてどのように評価しているのか分析するとともに、ファカルティ・アイデンティティが曖昧と言われがちな“政策系学部”出身者のキャリア・ディベロップメントを研究することです。

まず、(1)ですが、アンケート調査においては「総政の4年間はあなたに影響を与えたか?」、「現在の生活に満足しているか?」、「協同で仕事をするに関して、総政から影響を受けたか?」等の設問について量的データの分析を進めたほか、6名の卒業生へのインタビューという質的データの分析も実施しました。その結果、総合政策学部卒業生のキャリア形成に「自己表現を促す環境」、「新たな価値観とのふれあい」、「公共性」、「広範な領域への関心」、「外部に向けてのアンテナ」という5つのキーワードを見いだしました。

まず、「自己表現を促進してくれる環境」とは、**English communication** や基礎演習・研究演習、さらに一部の一般講義等で、教員から「あなたの考えを表現してください」と要求されること、さらにグループディスカッションや個人発表等のように、自己表現の機会が多数与えられたことに起因すると思われます。さらに、ただ単に機会が多いただけではなく、上手に自己表現していくクラスメートから触発されて、「自分も頑張ろう」と考えるなど、自己表現がさらに強化されるようなフィードバックの機能が働いていたこと、この2つによって成立したようです。これは、自らの考えを表現することをファシリティとする教員と学生とのインターアクションの結果、生まれた特徴とも言えるでしょう。

2番目の「新たな価値観とのふれあい」とは、海外生活や実務経験の豊かな教員たちの講義を通して、それまで信じてきた考え方を大きく揺さぶられる機会を持ったことです。生まれ育った国・文化に固有の価値観からだけで物事を判断するのではなく、他の社会や文化では、同じ事が異なって理解される可能性があることを学んだものと判断されます。

3番目の「公共性」は、総合政策学部が開設当初に「ヒューマン・エコロジー」を基本的視座として、人と環境との相互作用を考察することの重要性を学生に教えたことに起因すると考えられます。言うまでもなく、環境問題を考察することは、公共性について深く考えることを要求します。インタビューの中でも、学生時代はもとより、就職活動や仕事においても「何らかの社会での貢献」が念頭にあったという回答が目立ちました。

4番目の「広範な領域への関心」は、総合政策学部自体がインターディシプリナルな学問分野として、旧来の研究領域に属さず、講義内容でも非常に広範な内容をカバーすることで、広い学問領域への関心が自然に醸成された結果と考えられます。

最後の「外部に向けたアンテナ」ですが、これは学生たちが学内での活動にとどまらず、学外の組織に所属しながら活動することが少なからず存在していたことでもたらされた結果と考えられます。学生間で様々な情報を提供しあうこと、かつその範囲が学内だけにとどまらず、学外への窓口でもあった点において、卒業生たちの言葉を借りれば「外部にアンテナ張っている」者が果たした役割は大きいと思われます。

これらのキーワードは、卒業生たちがキャリアを選択した時に、どのような働きをしたかを、ある程度推測させてくれます。まず、「自己表現」が就職活動で有利に働いたことは容易に想像できます。実際に、卒業生たちも自分たちが就職活動でグループディスカッションなどを要求された時、総合政策学部で培った力が役立ったということを語ってくれます。

「多様な価値観」の理解では、進路選択において、国内にとどまらず、海外で仕事をすること、あるいはそれまで考えてもいなかった仕事に気づき、選択することにつながります。

「公共性」は、卒業生たちが自らの利益のみを追求するだけでなく、何らかの形で社会に貢献したいという考えから、職業や生活を選択する傾向に反映されているようです。

「広範な領域への関心」は、職場で新しい領域での仕事を任された時に、その領域で専門知識を持つ人と比較され、初めはどうしても自分の方が不利になるけれど、浅くても広く、様々なことに触れていたことが融通性につながることで克服できたということを報告する卒業生たちがいます。

5番目の「外部に向けてのアンテナ」は、他のキャンパスから隔離された神戸三田キャンパスの中で、学外の広い世界を知り、自らの生き方を考え、そして就職活動を送る際に役に立ったと考えられます。こうした外部に向けたアンテナは、卒業後の職業生活におい

ても、有効に働いているものと考えられます。このように、総合政策学部が創設当時に目指していたような教育方針やその特性が、卒業生にもなんらかの形で伝わっていることが明らかになったことは意義深いものであると考えます。

2011年1月には、これらの量的・質的データをまとめて、関西学院大学出版会から『卒業生が語る総合政策』として出版しました。この書籍は、今後、在校生に対するキャリア教育の教材、そして学外の受験生・高等学校に対する『総合政策学部』の理解・広報に役立てたいと考えております。

また、(2)については、2009年度と同様に1999～2008年度卒業生を対象にアンケート調査をおこない、194名から回答を得ました。主な内容は、卒業後の就職状況と業種・職種、職業選択の理由、その後の転職の有無とそのタイミング、理由、転職後の状況、卒業後の経験から学部教育あるいは企画についての提案、そして在校生へのアドバイスとメッセージ等です。データは現在、分析中ですが、卒業後の転職率が予想以上に高いこと、現在の職業について非常に満足している／かなり満足しているとの回答が60%であったことなど、興味深い傾向がわかってきました。これらの資料を在校生のキャリア・デザイン教育に活かしていきたいと考えているところです。

本研究の最終目標は、卒業生がたどったキャリア・ディベロップメントを研究することによって、政策系学部の社会的機能と存在意義を確認するとともに、“学部”としての社会への貢献を目に見える形とすることです。このような研究は、総合政策学部にとどまらず、人間福祉学部や教育学部、さらに国際学部等の新設学部についても、学部イメージの確立等から重要な意義をもっているものと考えるところです。2009～2010年度は、①卒業生と総合政策学部のネットワークの確立、②研究方法（アンケート、インタビュー等）の確立、そして③典型的なパーソナル・ヒストリーを抽出することで、今後の研究体制を確立することをめざしましたが、2011年度以降も、同様の研究を継続したいと考えております。